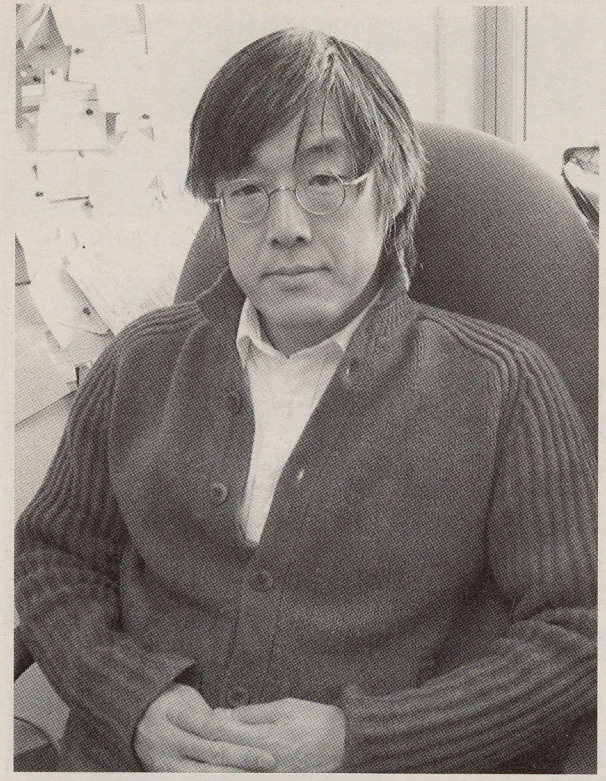
4/2004

「今」の表現を探し続ける

高橋源一郎

4月に処女作「さようなら、ギャングたち」の英訳版が出版され、北米デビューした作家の高橋源一郎さん。ニューヨークの出版社バーティカルのオフィスに、白いシャツにレザー・パンツという姿でさっそうと現れ、「めずらしく、時差ボケになってしまいまして」と言いつつも、質問にぽんぽんと答えてくれた。



たかはし　げんいちろう

1981年、「さよなら、ギャングたち」で群像新人長編小説優秀賞を受賞し、作家デビュー。現在小説を4誌に、書評を5誌に連載するほか、エッセイ、対談、競馬解説など幅広く活動を行っている。昨年は「詩人デビュー」も果たした。

訳されるべき作品

22年を経て英訳された「さようなら、ギャングたち」ついて、「自分で言うのもなんですが、すごくよい小説なので、誰かに訳してほしいな、と思っていました」と高橋さんは話す。

ネコが哲学書を読んだり、詩の教室に冷蔵庫や木星人が現れたり、超現実的で一見訳が分からないけれど、どこか心にひっかかり、ずんと響くこの物語。未だ熱狂的なファンは多い。翻訳者のマイケル・エメリック氏も「1ページ読み終わらないうちに『これは僕が訳したい』と思った」そうで、アメリカの版元探しに奔走し、今回の英語版出版につながった。

高橋さんは、デビュー前の執筆当時を振り返り「それまでの日本文学にはなかったことをやろうとしていた」と話す。その試みとは、日本文学の「湿った感じ」から抜け出し、アメリカ文学の「乾いた」考え方、書き方を取り入れること。そして、同じ日本語を使いながらも小説とはまったく違う、現代詩の表現方法を取り入れて小説を書くこと。

「現代詩は、テーマよりも言葉自体が持つ迫力とか圧力とか、熱度の方を大切にするんですね。もともと意味が分かりにくいメタファー（暗喩）を、さらに分かりにくくして、一つ一つの言葉が持つ熱を通して、テーマをを伝えようとする。あまりに心情があふれたり、何かを強く言おうとすると、人間はどもるでしょう。読者はそのどもっている様子を見て（何を言っているか分からなくても）『よっぽどすごいことを言おうとしているんだ』と分かる。そういうことです」

言葉を道具に例えるならば、現代詩の言葉は「よく切れるナイフや、鋭い針」。よりダイレクトに感情を刺激する言葉を使って書かれた本書を、「日本にとどまらず、世界文学という枠でみても、ほかに例のない優れた試みではなかったか、と思います」と、自身でも評価する。

村上春樹の一番の理解者だった!?

ニューヨークで開かれた朗読会の案内書で、高橋さんは、同年代の作家であり、すでにアメリカで人気を得ている村上春樹氏と「literary cousin（文学上のいとこ同士）」と紹介されていた。

「そう言われるのは分かります」と高橋さん。

「実は、『さようなら、ギャングたち』を書いていたときに、村上さんのデビュー作（『風の歌を聴け』）を読んだんです。2ページ読んだところで、『これはまずい！』と思いましたね。村上さんが、アメリカ文学を取り入れて書いているのが分かって、『先にやられた！』と、愕然とした。そこで読むのをやめました。処女作には、その小説家がこれから何をどう書いていくか、すべてが詰まっているんですね。2ページ読んだだけでも、村上さんが何を考えて、何を準備して、どう書いていこうとしているのか分かった。かなり似通った考え方をしている人が、ほんの少し前にデビューしていた。それから十数年間、最後まで読まなかったですよ」

「さようなら、ギャングたち」と同様、「風の歌を聴け」も、発表当時には、それまでの小説には見られなかった表現方法が物議を醸したが「あの小説を読んで、日本で一番びっくりしたのは僕（笑）」と高橋さん。「同時に、村上さんの一番の理解者も僕だったんじゃないかと思うんです」と語る。

「進みすぎた国」が生む文学

その村上春樹をはじめ、よしもとばなな、桐生夏生など、近年、世界各国で読まれている日本人作家が増えている。「さようなら、ギャングたち」英語版の版元であるバーティカルも、それをさらに大きな流れにしようと試みている出版社だ。

高橋さんは「日本文学、特に80年代以降の作品の中には、世界に紹介されるべきものがたくさんある」と言う。

「日本はアメリカよりも国が狭いし、急速に資本主義が進んで、最先端まで突っ走ってしまった国であると思います。日本が抱える『進みすぎた国の矛盾』が、文学、特に80年代以降の作品に反映されていると思う。だから小説として面白いし、世界で読まれるべきだと思いますね」

世界に紹介されるべき作家として、阿部和重、保坂和志、中原昌也、舞城王太郎、といった若手たちの名前を挙げる。

「彼らの作品は、70年代までにはまったくなかったテイストを持っている。近代が終わっちゃった、資本主義が煮詰まっちゃった後に、何をどう書いたらいいか、いろんなやり方を模索している。その模索の中から、すばらしい作品が生まれています」

3月末にニューヨークのジャパン・ソサエティーで行われた朗読会で、ファンと談笑する高橋源一郎さん

心中してもいいくらい好き

22年前「さようなら、ギャングたち」で、日本の小説界に「アメリカ文学」と「現代詩」という新しい表現方法を持ち込んだ高橋さんもまた、「今」を表現するために「何をどう書いたらいいか」模索を続ける一人だ。

現在は、鎌倉の自宅にこもって、小説、エッセイ、書評を書きまくり、息抜きとして「2時間で1冊完読」のペースで読みまくる毎日を送っている。

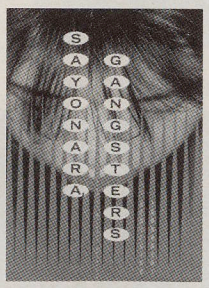
表現し続けるために大切なのは「書くことを無条件に好きになれるかどうかですね」と話す。

「心中してもいいくらい、あるいは、世界中に自分以外一人の人間しかいなくなっても、そいつのために書く、それくらい好きでないとダメですね。というのは、うまく表現できた、相手にちゃんと届いたという確信が得られることはないですから。究極的に結果がはっきりしないことを何十年とやるのは、それに対して絶対の愛情や執着がないと難しいですよ」

高橋さんに「心中の覚悟は？」と聞くと、にっこり笑って「はい」と答えた。（文／遠山清香）

インタビュー全文をメールマガジン「USFL.COMニュース」で後日発表します。登録は、www.usfl.com/mailmagazines まで

Sayonara, Gangsters



Genichiro Takahashi
Vertical

$19.95

購入は各書店、または www.vertical-inc.com まで

日本の商品がアメリカで買える?! しかも特典いっぱい! www.fujisan.com